C・B・マクファーソン著「Burk バーク、資本主義と保守主義」

御茶の水書房 1988 年 2 月 5 日刊を読む

エドモンド・バークの保守主義・自由主義とは

１．(１)バークは明らかに教養ある紳士だけを念頭において演説し、また著述していた。新聞は教養あるダブリン市民を対象にした。

(２)財産は安全でなければならないが、財産所有者は自分の財産をふやし、これによって国民の富を増大させ、全階級の利益をはかる義務がある。自分の才能に自信をもっているが、自力で立身出世する以外に道がありえない。

(３)かれの役目は、上流階級の人々に対して、もしかれらが不在地主であることをやめ、その財産を別の方法で運用するなら、かれらの生活はもっとよくなるであろうと主張し、それを納得させることであったと思われる。　P16 ～ 17

２．(１)バークは 1766 年から中断することなく、1794 年まで庶民院議員をつとめた。この間かれは、庶民院議員として行動し、庶民院で演説し、自分の議会活動を弁護するためにパンフレットや書物を刊行した。

(２)イギリス憲法(より正確には、かれがその中に読み込んだ諸原理)に対する変わることのない尊敬というかれの一貫性。　P21 ～ 22

３．(１)バークは勤勉な実践的政治家であることを誇りにしていた。

(２)庶民院の内外で、イギリス政治のあらゆる欠陥をあばき、穏健な改革を促進すること、そして、そのような改革によって内政と、アイルランド・アメリカ・インドにおける植民地統治の未来の悪政を防止すること、これがかれの目標であった。

(３)かれは、あらゆる個別問題を一般的諸原理と結びつけて論じた。

(４)あらゆる政治問題は、たんなる法律上の権利とか当座の便宜といった視点からでなく、公正または正義に関する何らかの基準にしたがって、あるいは長期的な人間の利益という観点から論じるべきだ。

(５)「原理への訴えかけ」。

(６)具体的な観察しうる諸事実を積み重ねることによって抽象的な公式と対決する。

(７)現実の諸状況の観察が先験的推論を圧倒すべきだ。

(８)現実の諸状況は道徳的諸基準によって判断されなければならない。

(９)プラグマティックであると同時に道徳的な考え。

(10)経験的なものを道徳的なものと結びつける試み。

(11)大まかに規定された道徳諸原理への精力的な訴えかけ、一般的諸原理の適用は、つねに複雑な現在の状況と人間のもろさとを考慮しておこなうべきだ。

(12)観察と歴史から引き出される経験的一般命題を用いて、抽象的諸原理から導き出される先験的な理論を反駁する。

(13)法の根底にある根本原理。 P23 ～ 34

4．(１)議会の無力化をもくろむ宮廷派の陰険な、これまでのところ成功している策謀をあばき、それを真正面から攻撃すること。

(２)政党とは、全員が同意しているある特定の原理にもとづき共同の努力によって国民の利益を促進するために統合した人々の集団である。

(３)正しい統治目標を定めることは思弁的哲学者の仕事である。行動する哲学者とでも言うべき政治家の仕事は、これらの目標を実現するための適切な手段を発見し、それを効果的に用いることである。

(４)庶民院議員は命令委任を受けた代理人ではなく、独立した判断を下しうる代表である。

(５)議会はひとつの利益―全体の利益―をもつ、ひとつの国民の審議集会である。ここでは地方的目的や地方的損得ではなく、全体の普遍的な理性から導き出される普遍的善こそが指針とならねばならない。諸君はたしかに議員を選ぶ。しかし、諸君がいったんかれを選んでしまったら、かれはブリストルの議員ではなく、議会の議員となるのである。

P38 ～ 42

5．(１)最広義における功利が法律上の権利に優先すべきだ。

(２)人民の幸福が唯一の政策批判基準であり、その幸福がどのように実現されるべきかは経験の丹念な観察によって、つまり過去のさまざまな政府の政策がもたらした幸福な結果と不幸な結果をくわしく観察することによってのみ決定されうる。

(３)これまでにも国王の食卓と台所をまかなう費用を試みはなされたがそれは失敗した。なぜであろうか。結果からみればまったく当然のことであったが、それは実はだれもがすぐには思いつかない原因のせいであった ― つまり、国王の台所で焼串をまわしていたのは庶民院議員であったからである。 P44 ～ 46

［コメント］

経済の世界的危機の中で今後の世界を考える際に最も必要なことは、自由主義とは何か、資本主義とは何かであると思う。アダム･スミスやこのエドモンド・バーク、ハイエクやミルトン・フリードマンに学ぶことは大きい。

― 2009 年 1 月 21 日林明夫記－